

漱石序論

——「意識」とは何か、その概念の抽出——

増 満 圭 子

はじめに

夏目漱石とは、生涯を通じて「自己」と「他者」の在り方、「理想的知識人」と「現実的生活」との間を彷徨い続けた作家である。

作品を通して、批判し、模索し、そして葛藤と苦悩を繰り返した彼が、常に追い求めたものは、分かるようで分かり難い自己としての存在そのものと、その意識ともいべき確かな手応えでもあった。

誰もが繁雑なる日常の、いわば惰性的なまでの「時」の経過に否応なく流されることを由としつつ、敢えて凝視することなき真なる心の奥底を、漱石は容赦なく押し開き、作品として我々の眼前に呈示する。それが漱石の示す、自己意識なのである。読者は、作品中に繰り広げられている虚構世界の、極めて具体的なるできごとを、当初は第三者然として、興味半分面白おかしく垣間見る。しかし、作品が進行するに従って、次第に眉を潜め、「心」その「内部」に、

改めて注意を喚起され、それを凝視し始める。作品の中に描かれる自己意識、そしてそこに描かれたる真実は、自らの心の澱みそのもの姿であることに、やがて我々は臍氣ながらも気付き始めて行くのである。流動的で、しかも変化に富み、捉えどころなき無限、それが漱石の模索する不可思議な意識の様相なのである。

本論は、漱石文学を読み解く上で、まず第一にとらえておかなければならないと考える、漱石の「意識」に対する概念についてまとめることを目的とする。心理学や哲学、精神科学の分野など、極めて範疇の広い用語でもある「意識」というものを、文学的、そして漱石の側面から改めてここに確認することは、今後、漱石がそれどのようなように自己のものとして構築し、やがて作品へと具現化していったのかを解くための、大きな手掛かりとなるであろう。

周知の通り、明治維新による新政府の誕生が、必ずしも近代文学の始まりとは一致しない。それまでの江戸近世文学を引き継いで、戯作的傾向の強かった当時の文壇が、小説を中心とするいわゆる「近代文学」としての形態に移行して行くには、その後なお二十年近い歳月が必要であった。明治十八年発表の、坪内逍遙『小説神髓』に著されている、「小説の主脳は人情なり世態風俗これに継ぐ」という一節は、その近代文学の幕開けを、今日でもなお我々にはつきりと示唆している部分である。ここに表されている「人情」を、情欲や心理・内幕、更には「内に隠れたる内部の思想」「内部に含める思想」などと、逍遙が次々と言い換えていることを根拠とし、稲垣達郎⁽¹⁾は「人間の内部的なものを大雑把に知・情・意とすると人情というのはだいたいが情に比重があるらしい」、「人情というのは結局感情へ幾らか傾斜させた人間心理ということになる」と指摘する。もちろん、今日的文学概念から考えれば、逍遙の論が極めて不十分な捉え方であったことは否めない。しかし前時代の文学傾向から比べると、かなり人間の心というものへ、その視点を向け始めたということだけでも評価できる事実であるとはいえるだろう。

やがて、この逍遙に触発されるようにして、明治二十年に発表された二葉亭四迷『浮雲』によって、わが国の近代文学は、真の黎明

を迎えるに至る。手短かにいえば作品は、主人公文三の、社会的疎外観、家庭的立場の喪失観などの錯綜により、自己を支え切れなくなった男の悲劇として展開されている。やがて文三を処すること叶わなくなった二葉亭は、突然筆を折る。結果的には、作者自身の葛藤によって中絶を余儀なくされたのではあるが（その理由については諸説論じられてきており、筆者の立場については別稿）、彼も又、明治という社会の中の自己喪失観に苦悩しながら生きていくことにもなったのである。二葉亭が再びその筆を取る日まで、なお二十年近い歳月が必要となった事実は、余りにも重い。

さて、わが国の小説はこうして普遍的人間性に繋がる人間心理の描写へと、その矛先を向け始めて行くのだが、それらの葛藤は、やがて、自然主義文学へと受け継がれて行く。例えば藤村が、『破戒』⁽²⁾の中で試みたような、世の中の制度や差別の矛盾に目を向けた、いわゆる社会小説的方法は、しかし、次第に告白体の私小説という、極めて「日本的」な、わが国独自の自然主義スタイルへと、その姿を変化させて行くのである。けれどもそうした自己告白という形での内面描写とは、明らかに違った葛藤が、時を同じくして生み出されてきたはずの、かの漱石には見られるのである。それが漱石文学の大きな特徴ともいえる、「意識」ではないかと考える。自然主義の告白には、社会の中で孤立した自身に対する焦点化があるだろう。自己の内面を凝視したうえで、「告白する」という行為は、

そのことによつて外部との関わりを完全に放棄しようとしているのではなく、関係性の中にあるからこそその自己の位置、すなわち、周囲の中の必ずどこかに規定されるその自己存在を、暗黙の内にも認識し、救いを得ようとするような慰藉としてさえ捉えられるのである。一例を上げれば、藤村の『新生』⁽³⁾は、あの新生事件を自己告白によつて浄化しようとした作者自身の試みとして見る事が出来るだろう。平野謙は、それを「恋愛と金銭からの自由」を目的とした動機と見る。たとえそれが、作者自らの自己救済の手段でも、又、節子（こま子）という女性に対しての「自分の誠実を意識」⁽⁵⁾した結果の行為でも、欲望、エゴイズム、そして疎外感などというものは、社会というものがいかに背を向けようとも、そこに存在するからこそ、そして他者との関係があるからこそ、成立する視野だったことは否めない。

そのような文壇的傾向の中で、しかし漱石の作品に登場する人物の心情は、社会という外界との接点を固持したうえでの苦悩ばかりとはいいい難く、自己内部である内面世界に、いわば自由に潜入し、自己を見つめているのである。当時全盛であつた自然主義とは確固たる距離を保ちつつ、文明批評の視野の広さと、洋の東西を問わぬ様々な思想から、独自の視点を探りだし、あくまでも世の中の制度や枠組みに、決して束縛されない意識の領域に、人間というもの、そして「個」というものを見出だそうとしたものではないかと思は

れるのである。

二

漱石における意識の問題について考えるとき、まずは、その概念について明らかにしておかなければならない。単に「意識」という言葉を取り上げても、その範疇は極めて広い。例えば、唯物論哲学における意識とは、人間の体と深く関連した、頭脳という器官に代表される高度に組織化された物質が、高度に発展した形態で、外界（環境）を反映する機能であると考えられている。この場合、物質が唯一の実体であるので、当然の帰結として、実体のない意識は、人間の身体に含まれる感覚という極めて基礎的機能から発生する作用であり、言語は、それを具現化するためのより実践的現実的手段であると見做される。

一方、マルクスによれば、「意識はそもそもその初めから既に一つの社会的産物なのであり、一般に人間が存在する限りそうであり続ける」というように、言語と同様、意識も観念も社会的に形成された一つの体系に繰り入れられ、客観性を持つに至るといふ。これは、意識を独自の精神的世界として余りにも肥大させ、それを人間生活から自立した力であるかのように主張したドイツ観念論に対峙する考えで、他との関連の中において自己自身を「対象化」とするといふ行為を示している。

けれどもこうした科学や哲学における領域からの意識分析は、本研究においては到底及ぶべきものではないので、ここではあくまでも文学という立場から、漱石の解釈を根幹とすることを前提に、以下考察を進める。

岡三郎⁽⁷⁾は、漱石が、意識に関して自己の立場を最も明確に自覚するのは、「科学や宗教に対して文学者としての自己の存在を考えると」であるということ、大正三年一月十三日付の畔柳芥舟宛書簡の中に見られるつぎのような部分を根拠に述べている。

僕は自分で文芸に携はるので文芸心理を純科学的には見られない。又見ても余所々しくとてもそんなものに耳を傾ける気がしない。僕のはいつでも自分の心理現象の解剖であります。僕にはそれが一番力強い説明です。

これは、漱石の意識に対する考えが、極めて独自性の強いものであるということを知る上でも重要な資料であるのだが、しかし、こうした見解は、何も大正三年のこの時期までを待つことなく、作家が具体物としての作品を表出し始めるずっと以前の時期から、人間の内部の「生」、その心理的奥行きに、強い関心を抱いていたということを知る手掛かりを、初期の記録のなかにも幾つも見付けることができるのである。

例えば、明治二十三年八月九日の、子規宛書簡に次のような記述がある。

此頃は何となく浮き世がいやになりどう考へても考へなおしてもいやで／＼断ち切れず去りとして自殺する程の勇氣もなきは矢張り人間らしき所が幾分かあるせいならんか(略)貴君の手前はづかしく吾ながら情なき奴と思へどこれも misanthropic 病なれば是非もなし(略)心といふ正体の知れぬ奴が五尺の身に蟄居する故と思へば悪らしく皮肉の間に潜むや骨髓の中に隠る、やと色々詮索すれども今に手掛り知れず

この書簡がかかれた明治二十三年という時期は、漱石が東京第一高等中学校本科在学中、二十四歳の頃である。江藤淳⁽⁸⁾はこの書簡について、「金之助の厭世観が何に由来していたのかは必ずしも明らかではない」、「彼は幾分抑鬱的でもあり、同時に恋をし始めていたのかもしれない」、「この恋は現実の日常生活の秩序の中では実現したい反道徳的な恋だったものと思われる」というように、嫂登世に対する「禁忌の恋」と「性の衝動」と分析しているが、この青年期の漱石の煩悶がたとえそうした所以であったにせよ、注目すべきは、彼がその葛藤に悩まされていたとき、見つめようとしていたのが、「いやにな」った「浮世」でも、「自殺」により達せられる彼

岸でもなく、否応なく存在せねばならない現実という中で、「五尺の身に蟄居」している「心という正体の知れぬ奴」なのであった、という点である。この時点で、肉体と精神とを既に、何らかの形で分離したものとして感じており、彼は現実の中での自己心理をどう把握し、どう処理してよいものか、迷っていたようにも思われる。「心」という「悪らし」い存在の不可思議を詮索しようとしながらもなし得ない、そんなジレンマを感じているのである。

又、明治三十二、三年頃の断片にも、「心は喜怒哀楽の舞台／舞台の裏に何物かある」という記載がある。ここでは「舞台の裏側」という言葉によって、その心理世界への興味関心が示されているのだが、こうした極めて早い頃からの記述にも、心の存在、肉体のどこかに存在しているはずの得体の知れない「何物か」に対する漱石の関心を、強く伺うことができるといえよう。

漱石にとって心の問題、内面の様相は、「いろいろ詮索」して見ようとする対象であり、そして「正体の知れぬ」存在でもあった。やがて、そうした人間心理の問題を、「意識」という概念によって彼独自の分析により改めて考え始めていくのである。

明治四十年に出版された『文学論』の中には更にその立場を明確にしたものとして、次のような部分が見られる。

意識とは何ぞやとは心理学上容易ならざる問題にして、ある

専門家の如きは、これを以て到底一定義に収め難きものと断言せし程なれば、心理学の研究にあらざる此講義に於て徒に此難語に完全なる定義を与へんと試みるの不必要なるを思ふ、たゞ意識なるものの概念の幾分を伝ふれば足れり

ここで述べられている通り、意識に関して、科学や心理学分野からの専門的解釈よりも、あくまでも漱石自身の立場である、文学という範疇においてそれを処理しようという姿勢がはつきりと示されているのである。

それでは、意識に関する漱石的視野について、以下に具体的にまとめてみたい。

三

序文に、「余はこゝに於て根本的に文学とは如何なるものぞと云へる問題を解釈せんと決心したり」とあるように、そもそも『文学論』は、漱石英国留学中に孤独と神経衰弱とに苦悩しながらねりあげられ、体系化された、一つの文学理論の書である。

この中で漱石は、まず、文学的内容の形式には「焦点的印象または観念」(F)と「それに付随する情緒」(f)があり、それら二つが、「F+f」の形式として具えられているものを「文学」として定義づけている。「F」とは、「意識的経験」、すなわち、外界の現

象・対象に対する自覚的認識として捉えることができる。ここでの意識とは、いわゆる認知的活動なのであるが、漱石の言葉をそのまま用いれば、それは「焦点的印象」と「観念」との、極めて広範囲な概念であると思われる。「印象」であるところのFとは、例えば、外界に対してのいわば接線としての役割を持ち、客観的認識機能として（自己の周囲を取り巻く現実という世界の円周を、忠実に辿るがごとく）極めて具体的に考えられるのに対し、同時に「観念」として処理される「F」は、「吾人が有する三角形の観念の如く」と漱石が説明を加えているように、その外界に存在する（と一般的には認識されている）ある事象について、個人の内面世界において構築される、抽象的領域に位置するものであるということができる。又、それに付随して表れる情念や心情などの「f」は、Fが増加するに当たって同時に増加して行くのであるが、この場合、fは決して独立しているのではなく、常に「F+f」という形式として存在し、かつ文学の実質は、その「f」によってこそ成立するということを強調する。要するに、非常に具体的、現実的である「印象」と、個人的、抽象的な領域である「観念」と、そしてそれによって発生する「情緒」的要素をすべて、総合させて捉えているのである。このように分析される人間の心的単位が、「意識の流れ」として、「時々刻々は一個の波形」を形成し、その波形の頂点、意識の最も明確なる部分が、焦点化されて進み行く。

すなわち、「意識の流れ」、「意識の波」は、この「F」という焦点的認識によって常に規定されるのである。しかもそれは、一人の人間の意識現象のみに止まらず、「社会進化の一時期におけるF」である、すべての人間に共通して動いていくという「集合的意識」の流動に関しても、「個人意識が統一を（ある点に於て）受けて社会的意識の安固（Solidarity of Social Consciousness）を構成す」、「個人と個人の意識のあらゆる点に於て合致せざる時、社会は成立せず、況んや文芸をや」というように拡大して捉えられる。これは、文学を普遍化、一般化して定義づけようとしている試みである。旧時代とは異なつて、意識が、社会的に存在しているという事実によつてこそ確立する、いわば社会的なものであり、それは感情をも例外として排除するものではないのである。いわゆる感情的部分には、常に著しい個人差があるとしても、それこそが近代における社会形態の特徴的性格であることを逆に定義しているようでもある。

こうして漱石は、『文学論』の中で、あくまでも「F」、つまり対象に接触して、そこから発生する認識としての意識を、第一に注目した。すなわち、意識というものを、外界に対しての極めて流動的・可変的な認知機能とみなすことにより、世界は、「意識」として対象化されるものの中にこそ、意味を見出だされる。ここにおいて、それ以外のもの、意識として焦点化されないものについてはす

べて疎外されてしまうのでもある。

更に、『文学論』における漱石的「意識」の意味が、こうして対象に対する認識に深くかかわってくるのであるから、例えば、心理現象そのものについては、まだ独立したものとしてみとらえられていないということが出来る。後の漱石文学の中に特徴的に見られるようになる、極めてパーソナルな領域にまで踏み込んで行こうという試みは、この時点においてまだ見られないのである。

明治三十九年に描かれた『吾輩は猫である』の後半で「呑氣と見える人々も、心の底を叩いて見ると、どこか悲しい音がする。」という猫の嘆きは、苦沙弥先生を初めとする登場人物各人にとって、現実という矛盾だらけの世の中、「文学論における一刻の意識」の、「F」に対する「f」であるところの半ば諦念をも含んだ哀しい気焰と見ることはできるが、それを、人間存在そのものに対する不安や苦悩というものにまで突き詰めて考えることは出来ないのではなにかとも思われる。この時点における意識には、奥行きや深みはまだ余り感じられないのである。

後年、漱石自身「私の個人主義」（大正三年十一月）という講演で、『文学論』を表した当時における意識、及び文学に対する捉え方を、「失敗の亡骸」、「畸形児の亡骸」として、自ら戒めてもいるのだが、しかし、この『文学論』の中にこそ、初期漱石の最も基本的文学観が構築されており、それがこうした意識認識として表され

ているということは、否めない事実である。

では、先述のように、意識が自己認識の「F」として、情念「f」を伴いつつ流動するものであるとすれば、その場合の他者は果たして、どう存在しているのであるか、改めて考えてみたい。

イギリス留学中にかかれたこの論が、「たとへば西洋人がこれは立派な詩だとか、口調が大変好いとか云つても、それは其西洋人の見る所で、私の参考にならん事はないにしても、私にさう思へなければ、到底受売をすべき筈のものではないのです。」（「私の個人主義」）という苦悩の中で導き出されたものであり、「学問をやるならコスモポリタンのものに限り候英文学なんかは椽の下の力持日本へ帰つても英吉利に居つても頭が上がる瀬は無之候（略）僕も何か科がやりたくなつた」（明治三十四年、寺田寅彦宛書簡）ともあるように、異郷に身をおきながらも、ついに融合しきれなかつた漱石の、他者によつて軽々と踏み込んだりすることのできない領域の存在に対する実感をここには随所に伺える。

すなわち『文学論』における「F」は、先に取り上げたような、極めて利他的認識機能としての意識ばかりでなく、集合意識というより大きな意識（それこそが当時の漱石におけるイギリスの存在そのものでもあつた）をも、その視野にいれていることがよりはっきりとわかってくるのである。

「私」という存在は、他者の内面界にあつては（他者の意識によ

り対象化され、幾分の変形を余儀なくされてしまうので、決してそのままの形ではあり得ない。そして、そうした個人的性格は、それすらが、近代社会における総括的意識の特徴という見方によって位置づけられる。すると、もはや、一般化し普遍化した意識によっては、何者をも個別化することすらできなくなってしまう。他者と自己は決して融合しきれず、又理解し合うことも出来ない。他者は、「他者」であるというよりもむしろ常に対象化されるものとして存在するのである。

また、一方では、明治三十八年から同四十年にかけて講義された『文学評論』の中に、次のような一節があることにも注目できよう。

文学を社会から切り離して全く独立した現象として論ずるか、または社会全体の有様を叙して其全体が動いて居る中に自然に文学が織り込まれているようにするか。第一のようにするのは筋道を見るには都合がよい。分類をやるのには都合がよい。然し冷やかである。暖かみがない、(略)第二の方法に従ふと活きた世の中が分る、其活きた世の中から活きた文学が自然と活現してくると同時に分類も立たぬ、甚だ込み入つて無茶苦茶である。

……

スペンサーのような何でも科学的に世界を見て抽象的に智識

を概括して行かうと許り思案する人は第一の方法より他に方法がない様に考へているかも知れない。然しながら天然の現象でも歴史的事実でも抽象的な原理を掴み出す丈けが何も吾人の要求を満足させるものではない。

先の書簡の中に見られたように「科学がやりたくなつた」という漱石が、しかし、必ずしもその科学的な分析を、文学や心理に関して成し遂げようとはしていないことも又いえるのである。『文学論』での「F」の定義が、印象(具体)と観念(抽象)との両極面から構築されているということなどから考え合わせても、社会科学の領域と、心理学的意識領域との混在が、外界という世界と個人的意識レベルの問題において、この時点ではまたすっきりとした形で融合されて考えられない、または自己消化しきれないと考える方が妥当であろう。彼は科学を信じたいと思えば思うほど、そこにある、極めて個人的な意識存在に、次第に気付かされるようになっていったのである。

ところで、漱石の作品については、周知の通り明治三十八年一月に「吾輩は猫である」第一回が雑誌『ホトトギス』に発表されたのが最初であるが、又、初期作品集として、ほぼ同時期である明治三十九年出版の短篇集『漾虚集』に含まれる七編のうち、巻頭の「倫敦塔」発表がやはり明治三十八年『帝國文学』一月号、又、「カー

ライル博物館」も同じ一月に『学燈』に発表されている。これらの時期に作品の発表が相次いでいることは、漱石文学の出發時期の問題として、又、その意識と内面性の問題について考える上でも重要であるのだが、まず現時点においていえることは、『吾輩は猫である』における、「現実性」とともに、『漾虚集』における、あくまでも現在という「時」に固定された視点から、虚構でもない、しかし架空ともいえない、別の次元の空間が不可思議にも描出されていることも、「猫」の世界と対照的に考える上で興味深いことである。

そして、いわゆる「F」であるところの、認識としての「意識」は、『漾虚集』においては、現実というすべての障壁を超越し、しかし、心理という内面においてはではなく、時間的空間的異次元の、別枠な世界を焦点化する方向性を持っているともいえるであろう。

すなわち、進化論的な社会科学思想にばかり捉われず、しかし、心理という不可思議なる世界に埋没して行くでもなく、異次元という別の空間に、認知機能としての意識を投影させるという方法によって、広大な範囲のいわゆる事象の中で、分裂を繰り返しながらもやがて焦点化され行く意識の正体を解明しようとしている試みである。明治三十八年前後のこうした具体的な作品の中には見い出すことができるように思われるのである。

四

さて、明治四十年四月東京美術学校において講演され、後、同五月四日から六月四日まで『東京朝日新聞』に掲載された論文「文芸の哲學的基礎」の中にも、漱石的意識の手掛かりとしての、ある叙述が見られる。

要するに意識はある。又意識すると云ふ働きはある。是文は慥であります。(略) して見ると普通に私と称して居るのは客観的に世の中に実在して居るものではなくして、只意識の連続して行くものに便宜上私と云ふ名を与へたのであります。

ここにおいては、『文学論』の中に見られた、外界に対する、いわゆる反射による焦点的認知機能である「意識」という解釈から、存在としての「意識」へと、その捉え方を変化させているということが伺えよう。

物我の世界を見た所では、物が自分から独立して現存して居ると云ふ事も云へず、自分が物を離れて生存して居ると云ふ事ももうされない。(略) だから只明らかに存在して居るのは意識であります。さうして此意識の連続を称して俗に命と云ふの

であります。

と漱石がいうように、この「意識の連続」が我々の生命そのものであるとする考え方は、明らかに先の『文学論』に見られた意識概念よりも、更に奥行きを見せている。いわば直線的、流動的認知作用だった意識が、「物」と「我」との対立から成り立っているというこの世界においては、「我」という自身の肉体をも離れ、この世の中における一切の事象、他の存在を規定するというのである。他者の存在についてさえ、その「私」という意識の中に表出される「物」としてのみ、とらえられる。

『文学論』の中で認知的活動における、いわば「役割」と見ているはずの意識が、ここにおいては、まず第一に、存在する「命そのもの」へと変化しており、更に、その「生命」、すなわち「意識の連続」がいかなる意識内容を選択するかによって、やがては「理想」、「理念」、「観念」というものまでもが導かれて行くというのである。

漱石の「意識」見解は、こうして「意識」そのものに対して重要な意味を持たせるようになるのであるが、それを更に明らかにするために、次なる彼の言及にも注目していく必要がある。

五

先づ我々の心を幅のある長い河と見立ると、此幅全体が明らかかなものではなくつて、其うちのある点のみが、顕著になつて、さうして此顕著になつた点が入れ代り立ち代り、長く流を沿ふて下つて行く訳であります。さうして此顕著な点を連ねたものが、我々の内部経験の主脳で、此一部分が種々な形で作物にあらはれる……

これは、明治四十一年に講演された「創作家の態度」の中の一節である。

心、すなわち意識を、「幅のある長い河」ととらえていることは前論等と共通する見方ではあるが、ここでは、まずその冒頭部に、「心の持ち方、物の観方で十人、十色様々の世界が出来又様々の世界観が成り立つ」とあるように、それぞれの個人レベルにおける意識世界へとその見方を進めている点において、前論を更に発展させていることが伺える。

我々は教育の結果、習慣の結果、ある眼識で外界を観、ある態度で世相を眺め、さうして夫が真の外界で、又真の世相と思つてゐる。所が何かの拍子で全然種類の違つた人(略)の意見

を聞いて見ると驚ろく事があります。夫等の人の世界観に誤謬があるので驚くと云ふよりも、世の中はかうも観られるものかと感心する方の驚き方があります。

「文芸の哲学的基礎」の中では、物と我とに分けられて、自分以外のものは全て、他者という人格さえも「物」の領域として考えられていた意識の世界が、この冒頭部からも分かる通り、その他者の意識にも、(他者であるなりの)「我」の存在を認めようとする方向に転じている。そして、「観様で色々に見られる」「人々個々別々の世界」では、物の見方も、「百人百様ある」とも述べている。

ここで最も顕著に見られる傾向は、それまで「物」と「我」の対立であった世界を、自身である「我」とそれ以外の範疇である「非我」という見方で捉えなおしているという点である。

更には、こうして個々なる意識世界を改めて認識した上で、その個人意識においてさえ、「我」というものは常に(意識の流れとして)動いている存在で、時間という観点から区別すると、それは過去の我と現在の我とになるという。

我々の内界の経験は、現在を去れば去る程恰も他人の内界の経験であるかの如き態度で観察が出来る様に思はれます。

こうした見方はすなわち、現実の世界においては、完全に理解することなど不可能な他者の「意識」が無数存在すると同様に、一見全知的領域であるはずの自己意識においても実はそうではない。単に時間的流れのみを取り上げても、過去である自己は既に「我」ではなく、「非我」の範疇に含まれるものであり、更には、現時点においてさえ、意識の中には矛盾を含んだ多くの要素がある、すなわち「意識の幅」があると考えるものである。そして我々は、現時点において、それらの内の、ある部分のみを取り出して焦点化していると見る。

そうした見解が、「個人の性格中のある特性が、その個人の生涯を貫いて居る事は事実」としながらも、「この特性だけで人物が出来る上がつて居らん事も事実」、「のみか、この特性に矛盾反対する様な形相をたくさん備えて居るのが一般の事実であります」というように、自分をも含めたいわゆる小説家がある特定の性格描写に固執することを否定する。性格というものは決して固定されてしまう類のものではなく、観察、解剖されるべき対象とみなしているのである。

一言にして云ふと(略)、同一の行為でもその動機が遙かに趣を異にしてゐる訳で、そこを観察したら十分開拓の余地がある

……

複雑になりつゝある吾々の心のうちをよく観察したら、色々な面白い描写ができる事だらうと思います。

というのである。

このことはまた、およそ三年後、明治四十四年に発表された『思ひ出す事など』の中に、「吾々の意識には敷衍の様な境界線があつて、其線の下は暗く、其線の上は明らかである」というような叙述が見られることから、明らかである。

すなわち、『文学論』等に見られたように、作家としての活動を開始する以前から、心理、意識に特有の興味・関心を抱き続けている漱石が、こうして次第にその心理の内部にまで深く入り込んだ目を向けて行くということが改めて確認できるのである。

六

このように具体的言及を挙げて行けば、漱石の意識に対する見解が、『文学論』における「F」を根本としながらも、少しずつ変化していることが明らかである。

柄谷行人⁹⁾は、こうした漱石の意識について、「自己自身に關係する観念性、すなわち単なる心的領域ではなくあたかも心的領域を對象的に持ち得る心的領域である」と述べ、「漱石の小説は、自己意

識を罪とみなすことによつて、例えば恋愛心理に一つ一つ倫理的注釈を加えずにはいないし、また一方、自己意識を制御しえない『内部の暴力』としてとらえることによつて、心理描写を超えた突発的な行為を描く」と分析し、意識をただ「意識」そのものとしての心理分析としていないことを指摘している。漱石が『文学論』にいう「F」であるところの「印象」が、外界のある部分を焦点化するのと同時に、自己意識の内部に対しても、見えざる何かへの不安や恐れをあえてその中に見い出そうとするが如く焦点化を行っているということがいえるだろう。

こうした意識の解明こそが、彼独自の「生」の探求そのものでもあった。

後、大正三年十一月二十五日、学習院輔仁会において講演された「私の個人主義」の中に、次のような一節がある。

近頃自我とか自覚とか唱えて幾ら自分勝手な真似をしても構わないという符徴に使うようですが其中には甚だ怪しいのが沢山あります。彼等は自分の自我を飽迄尊重するやうな事を云ひながら、他人の自我に至つては毫も認めてゐないのです。苟しくも公平の眼を具し、正義の観念を有つ以上は自分の幸福のために、自分の個性を發展して行くと同時に、其自由を他にも与へなければ濟まん事だと私は信じて疑はないのです。

漱石の意識の捉え方はこの時点において、よりはっきりと彼独自の理論を構築させている。長きに渡る意識世界への拘泥が、やがては「他」との共存へと、結び付けられて行くのである。自己の立場からの判断と行動、「我」を根本としながらも、それが漱石においては、他者を手厳しく断罪し、あくまでも自己にのみ固執するいわゆるエゴイズムとははつきりと異なった形で認識されているのである。

さて、こうして漱石における「意識」の概念をその著述から抽出した上で、作品を通じて更に具体的にその何たるかを考えようとするとき、漱石が必ずしもそうした意識理論を彼自身の内部からのみ構築させていったのではなく、欧米の心理学者を初めとする様々な理論に非常な関心を寄せていたという事実⁽¹⁾に、改めて立ち戻らなければならぬ。彼が、W・ジェームズやベルグソンを経ているということは、極めて重要な事実である。それを漱石がどう踏襲し、自身のものとして昇華していったかということ、考察する必要がある。そして、東洋的、西洋的思想の影響やその背景なども鑑み、具象物としての作品を、微細に分析することで、漱石の意識の意味というものを改めて明確化することができるであろう。

(注)

- (1) 『人と作品 現代文学講座』明治編Ⅰ(昭和三十六年十月、明治書院)
- (2) 島崎藤村『破戒』、初出は明治三十九年三月自費出版された。
- (3) 『新生』、大正八年一月春陽堂。
- (4) 『新生』の主人公岸本は藤村自身であり、作品は実生活上の秘事を公にした告白小説で、事件の進行中発表されたことにより、現実の事件自体が解決に影響を受けるといふ特異な状況を生んだ。
- (5) 『島崎藤村——人と文学』(昭和三十五年、新潮文庫)
- (6) 『新生』第二部、百二十三(昭和六十年、新潮文庫)
- (7) 『ドイツ・イデオロギー』(昭和四十九年、河出書房新社)
- (8) 『夏目漱石研究』第一卷(昭和五十六年、国文社)
- (9) 『漱石とその時代』第一部(昭和六十年、新潮社)
- (10) 『意識と自然——漱石試論』、『畏怖する人間』所収(昭和四十七年、冬樹社)

※本文引用は全て『漱石全集』(昭和四十九年、岩波書店)による。なお、原則として漢字は適宜新字体に改めた。